

Title	<雑録> 林となつて靈異を示す話
Author(s)	水野, 清一
Citation	東洋史研究 (1938), 4(1): 44-44
Issue Date	1938-10-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138780
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

林となつて靈異を示す話

『魏書』には木が生じて林となる話が散見してゐる。(1)太祖道武帝は建國三十四年七月七日、參合陂に生れたがそのえなを埋めた坎に、明年榆を生じ、つひに林になつたと卷二の太祖紀に見える。(2)林になつたとは書いてないが、卷一序紀には昭皇帝がたまたま蠱に中り、吐いたところに榆の樹を生じた、元來、參合陂には榆がなかつたので、世人がこれを異とし、いまに至るまで記し傳へてゐるとある。參合陂晋北のある榆の樹、榆の林について、かうした因縁話があつたことは、樹や林を靈視した托跋人の態度を反映してゐる。(3)道武帝の元年には昭成帝、すなはち什翼犍を雲中の金陵に葬つたが、ひつぎをつくつた際のこけらがことごとく芽生えて林となつたところがある。卷二太祖紀 林になつたものが漠然と偉大なる人物のえなとか、嘔吐物といつたやうな身體の一部分でないことが、この第三話とつぎの第四話との特色であつて、それはいづれももと木であつたものの、しかも生木でないものが、ある靈異を示して、芽を出し林となることをいつてゐるのである。こゝに一種の神意うらなひの意をふくんでゐると思ふ。(4)卷一〇八の禮儀志につぎの話がある、大同を去る四千餘里、烏洛侯國(興安嶺山中)に魏の祖先がゐて、石を鑿して石室の祖廟を作つた。太延元年、中書侍郎李敞を遣してこれを奉祭せしめ、天地に配して皇祖先妣を祭つた。ところが敞等の祭にあたつて、樺の木を斬つて立て、牲をかけて還つたがその後、立てた樺の木が生長して林になつたといふ。土民ますます神奉し、みな魏國の奉誠が靈祇に通じたしるしとしてゐる。これは『山海經』に出て來る夸父の杖が、陶林になつたといふ話と全く同じであつて、林を神靈視する態度のほかには、神意をうかゞはうとするうらなひ的要素が多分にある。立木して牲をかけたことは正にシャーマンの猪竿の儀を思はす。(みづの・せいち)